

2 性犯罪被害者のための総合的支援としてのワンストップ支援センター

○ワンストップ支援センター設置促進にかかる各種施策

性犯罪被害者が被害直後に総合的な支援を1か所で受けることができる支援センターの設置促進は、犯罪被害者団体及び犯罪被害者支援団体からの要望を踏まえ、第2次基本計画の中で、以下のような施策として盛り込まれた。

- ・ワンストップ支援センターの開設・運営の手引の作成・配布（内閣府）
- ・性犯罪被害者対応拠点モデル事業の検証及び結果の提供（警察庁）

- ・医療機関に対する啓発・協力可能な医療機関の情報の収集及び提供（厚生労働省）
- ・医療機能情報提供制度における登録内容への追加（厚生労働省）

○設置促進に必要な調査・検討

ワンストップ支援センターの開設を検討している地方公共団体・民間団体等に役立つものとなるよう、以下のように、設置促進に必要な調査・検討を行った。

- ・性犯罪被害者からの被害後の二次被害等に関する聞き取り調査

聞き取り調査における回答（一部）

<p>【心身への影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 急に涙があふれる、震えが止まらない、身体が痙攣する。 ○ 起きている時は、考えないようにするので大丈夫だが、夜になると不安で「寝ないようにしないと」という意識が働き、外が明るくなるまで起きている。 ○ 夢があまりにリアルなため、夢と現実の区別がつきにくくなり、加害者にまた襲われるのではないかと不安が付きまとう。枕元に包丁を置いて寝ると比較的落ち着いた。 ○ 何も感じない、つらくもないし、悲しくもない状態だった。 ○ 毎日死にたいと思っていた。どうやったら死ぬのだろうと、そればかり考えていた。 ○ 自傷行為（手首、足首）。 ○ 病院ではPTSDと診断された。 <p>【社会生活上の影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 犯人が捕まっていないので、いつ自宅に来るか、いつ襲ってくるか心配になり、外出することが難しくなった。 ○ 職場に男性がいるだけで働くことができない。 ○ 仕事では、記憶力、判断能力の低下から、それまでには絶対にしないようなミスが増えた。 ○ 仲の良かった仕事仲間とも話せなくなり、退職した。 ○ 1年前に引っ越したばかりにもかかわらず、引っ越しを余儀なくされた。引っ越しなどに費用がかかり、経済的に困窮した。 	<p>【警察に通報した／被害届を出した理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 被害後2週間が経過してから、病院の勧めで通報した。 ○ とりあえず警察に行ったほうがよいといわれ、警察で被害届を出すことを強く勧められたから。 ○ 誰からも被害届を出すかどうかという説明を受けず、何も知らずに被害届を出した。被害届を出したことを後悔している。 ○ 最初は加害者からの逆恨みが怖くて被害届を出すつもりはなかったが、被害から1ヶ月後に届ける決心がたった。 <p>【警察に通報しなかった／被害届を出さなかった理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 警察沙汰になると、被害者であっても仕事を辞めなければいけない職場だから。仕事を続けたいから。 ○ 誰にも知られたくなかった。 ○ 加害者が身内だったため躊躇した。 ○ 警察に行くほどのことではないと思った。 ○ 警察に行つたが、被害届の手続きの教示がなかった。 ○ 自分にも非があった。 <p>【刑事手続きでの二次被害】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 正義感が強いのは分かるが、普段、凶悪犯を相手にしている人は、加害者対応と被害者対応が一緒になってしまっているのではないかと感じた。（加害者が身内や、職場の人であることなどから）話せない、話したくないと言うと責められてしまった。 ○ 最初に行った警察署で、「うちの管轄じゃない」と言われた。パニックになりながら警察行ったのに門前払いされた。 ○ けがをしているのに、威圧的な態度で、相談できる状態ではなかった。 ○ 助けるというより、自分たちの質問に答えろ、という態度だった。 ○ 検察でもまたはじめから、事件のことをすべて話さなければならなかった。 ○（裁判をすることになって）被害者側が証明しないといけないことが多い。本当のことを言っているのに信じてもらえなかったり、法律の都合に合わせて動かされる。「同意だったのではないか」ということに対して、違うと言っても、自分が悪くないという証明がすごく難しい。怪我をしていない、殴られていない、ということで、抵抗していない=同意と決めつけられてしまう。
<p>【被害後相談した人（機関）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 母親・父親、交際相手、友人 ○ 病院（産婦人科、診療内科、外科、口腔外科、精神科等） ○ 弁護士 ○ 警察 ○ 勤務先会社 ○ カウンセリング機関 ○ 支援センター、女性センター、パープルダイヤル など 	
<p>【医療機関での二次被害】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 最初に友人が女医のいるクリニックを調べてくれて、診察に付き添ってくれた。しかし、警察沙汰に巻き込まれたくないと診察を断られた。 ○ 友人が代わりに受付をしてきている間、離れたところに隠れていたから、看護師がわざわざ姿を見に来た。心配する様子もなく、性犯罪被害者として話題にされた気がする。 	
<p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 被害後、何かの支援につながろうと相当動いたにもかかわらず、得られるものは僅かであった。 ○ 事情を話してから、ここでは適切な支援を受けられないと判断することが多く、苦痛であった。 ○ 病院や警察、司法と何度も同じ質問をされて、話すのは苦痛だった。 ○ 弁護士は3人目でいい人が見つかったが、ほとんど自力で探した。 	<p>【行政及び民間団体の相談窓口での二次被害】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「ここで話は聞けない」と言われた。3回電話して、3回とも別の所を紹介すると言われた。しかし、紹介された先でも「別のところへ」とふられた。 ○ 子どもがいないで仕事に就いている人は、経済的に自立しているとみなされ、門前払いをされた。 ○ 毎回担当者が異なり、返ってくる回答内容もバラバラで混乱した。 ○ 具体的な説明を求められた際、被害について話そうとすると被害場面のフラッシュバックが起きて、話せる状態ではなかった。被害者の心理や症状への理解がないので、うまく話せない状態でコミュニケーションがとれなかった。

内閣府では、性犯罪被害者11人について、被害による心身への影響、社会生活上の影響、被害についての相談状況などについて臨床経験者との対面形式での聞き取り調査を行った。

・我が国におけるワンストップ支援センター先行事例の調査・検討

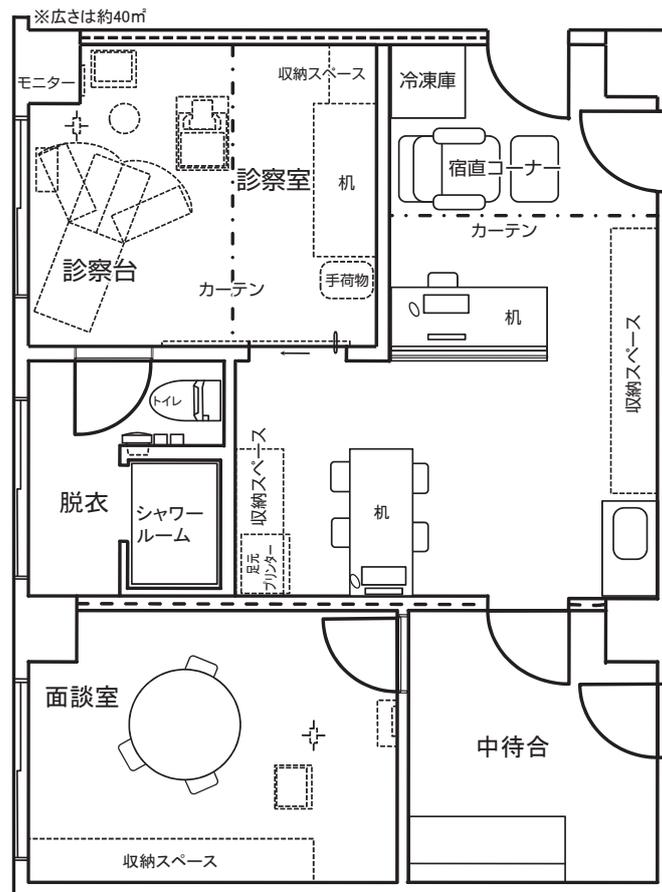
次の2つの先行事例の運用状況等について調査・検討を行うとともに、警察庁による性犯罪被害者対応拠点モデル事業の検証結果を参考とした。

①性暴力救援センター・大阪 (Sexual Assault Crisis Healing Intervention Center Osaka) (通称「SACHICO」)。

大阪府松原市・阪南中央病院内)

②「ハートフルステーション・あいち」
(警察庁・愛知県警察による平成22年度性犯罪被害者対応拠点モデル事業。
愛知県一宮市・大雄会第一病院内)

SACHICO見取図



SACHICOは、阪南中央病院の一角に、一般外来・病棟とは隔離された形で設置されており、専用の待合室、面談室、診察室、スタッフルーム、トイレ・シャワールームを備えている。

○諸外国における性犯罪被害者支援の状況

先進的な性犯罪被害者支援の取組を行っているカナダ及び韓国について訪問調査を実施した。

- ・カナダ・オンタリオ州の性犯罪被害者支援

訪問調査を行ったオタワでは、カウンセリングサポート、医療、刑事司法の3つが中心となった被害者へのサービスが提供されており、「性的暴行プロトコール」に、提供されるサービスの提供機関、サービス内容、利用方法などが書かれ、被害者及び一般社会へ周知が図られている。

- ・韓国のワンストップ支援センター

2006年8月、ソウル市の警察病院内に最初のワンストップ支援センターが設置されて以降、2012年3月現在までに、警察病院などの国公立病院、大学病院、民間病院など16か所に設置されている。

○ワンストップ支援センターの設置促進のための手引作成

前記の調査・検討を踏まえ、内閣府において、関係機関・団体等の中で共通の理解と認識を持つことにより、相互の連携協力の密度を上げてワンストップ支援センターを促進する環境を作り、また、それぞれの地域で活用できる資源や実情に応じた性犯罪・性暴力被害者支援の充実を図ることを目的として「性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センター開設・運営の手引」を作成した。

ソウル市ポラメ病院内ポラメ・ワンストップ支援センター



PANSAKU 山本恵子

■はじめに

私は、「PANSAKU」という女性2人組アコースティックデュオのギターボーカルをしている「ぱん」（本名：山本恵子）です。

2010年6月、大阪で開催された性暴力チャリティーコンサートをきっかけに、全国各地の被害者支援イベントなどでトークライブをさせていただいています。

私自身が、性犯罪被害者であり、2010年6月に、その自らの被害体験をもとにした「STAND」という曲を発表しました。CDの収益は、フォトジャーナリスト大藪順子（おおやぶのぶこ）さんの写真プロジェクト「STAND～性暴力サバイバー達の素顔～」に全額寄付され、性暴力撲滅活動のために使われています。

■被害をうけて

2004年7月15日。音楽練習の帰り道、疲れて立ち寄ったコンビニの駐車場で、突然見知らぬ男が車に乗り込んできました。首を絞められ、「殺すぞ!」と脅され、所持金を盗られ、人気のないところまで運転させられた私は、自分の車の中でレイプ被害に遭いました。

「このまま殺される・・・。」死の恐怖の中で必死に耐え続けた屈辱的な時間は、私がこれまで生きてきた人生も、「私」という存在そのものも、全てを否定されたような絶望そのものでした。

「私は汚れてしまった。これからどうやって生きていったらいいの？神様助けて下さい。」と、心の中で何度も繰り返しました。助手席のドアから立ち去った犯人は現在もまだ捕まっていません。

■性犯罪被害者施策に対して思うこと

私は、先にふれたように、レイプ被害直後、どこへ助けを求めてよいかわからず、『犯罪に遭ったらまず110番』という、幼い時からインプットされていた情報で何もわからず警察へ駆け込んだ人間です。でも、現実的には、私のように警察へ届け出る人の方がはるかに少ないと聞きます。

性暴力被害に遭ってしまった被害者は、心に深いダメージを負います。さらに「恥ずかしさ」が追い打ちをかけ、被害を口に出せずにいる方も多いと思います。誰にも相談できず、妊娠・性感染症などの身体的不安や、その後の自分の人生に対する絶望感を孤独に抱えてしまうことになります。

今、日本では、ハートフルステーションあいちや、性暴力救援センター・大阪（SACHICO）などを皮切りに、性暴力被害者のワンストップセンターが全国で作られる動きがあります。

被害に遭ってしまった人がこの場所に駆け込んだ時、医療的ケア、支援員による心のケア、加害者検挙につながる警察の捜査など、あらゆるサポート体制が被害者を中心に動き出すシステム作りは、とても必要であり、大切なことだと思います。

今はまだ、すでに動き出しているワンストップセンターの存在を知らない人の方が、社会には圧倒的にたくさんいます。被害に遭ってしまったから、その存在を「知る」の

では遅いと思います。

「自分には関係ないこと」だと思っているような、幸いにも被害に遭っていない人たちが、『性暴力・性犯罪被害にあったら、まずワンストップセンターへ』と、頭のどこかで誰もがインプットできているような広報の仕方をしていく必要があると思います。

“全ての人が知っている存在にする。”それを前提とした上で、そこが被害者の方にとって安全に守られた場所であり、信頼して駆け込める場所であるように、その他あらゆる面で配慮できるように、関係者の方々には今後も議論を進めていただけたらと、願います。

■最後に

私は、本音を言ってしまうと、被害者支援と呼ぶこともできないような、ただ一性犯罪被害者でありミュージシャンでしかすぎないので、今すでにこの瞬間も、日本中で被害者支援を現場で奮闘されている方たちのことを思うたびに、心から感謝の気持ちでいっぱいになります。同時に、今日もどこかで性暴力によって傷つけられ、暗闇の中にいる人たちがいるのではないかと思うと、胸が痛くなります。

1人の被害者の方の人生を長い目で支えていくために、身体的・精神的・また、経済的な面においても、警察、病院、行政、司法など、あらゆる機関の連携体制が常に網の目のように張り巡らされているような社会のシステムが構築されてほしいと願います。

もしかしたら現実的には、被害者の支援体制を整備していく中で、予算の関係や、場所の制限、人力的な問題など、なかなか100%理想像のようにはいかない場合もあるかもしれません。

でも、そんな時でも被害者の1人として思うことがあります。たとえ「システム」に限界があったとしても、「人が人を救いたいと思う気持ち」は、シンプルでありながら、最もその人自身に委ねられる領域であり、たぶん限界はないと思います。

自分の肩書きを通して対応しようとするのではなく、まず1人の人間として「傷ついた目の前の心に寄り添う姿勢」こそが、被害者に安心を与える瞬間だと思います。

これから少しずつ性犯罪被害者ワンストップセンター開設が進み、各地の性暴力被害者支援も地域で進んでいく中で、「人が人を思う」、そんな優しい心が溢れ出る被害者支援が、個人レベルでも当たり前に行われていく世の中になりますように。

心から願いをこめて